

# セイレン



## プロローグ

---

あの頃、僕らはふとしたことで簡単に傷付き、些細な事にも苛立ちを覚えた。

放り出すのは容易くて、追いかけてくのは困難で。

心はいつも忙しなく揺れていた。

あの頃、確かに僕らは知ってた。

自分の弱さも、それを認められない小さな自分も。

呆れる程に痛みに敏感で、傷付くことも傷付けてしまうことも只、怖くて。

押し潰されそうな心を抱えながら必死で歩いた、あの頃。

——例えば二人の少年が居て、友達になったばかりで。

さほど心も通じぬ間に突然、一人学校へ来なくなったら——

あいつ……滝口蓮司と出会ってわずか四ヶ月足らず。

出会ってからの月日の長さで友人を量るつもりはさらさら無いが、その月日に見合った感じに俺はあいつを知らないと思った。

あいつも俺をきっと、ちゃんと知らない。

俺達が通う高校はぎりぎり都内に位置する、平凡な共学校だ。

少々風変わりな点といえば、普通科の他に学級は少ないものの芸術科が存在する為に、美術や工芸に関心の強い生徒が若干多いといったところか。俺達は、芸術科の生徒である。

入学して間もない五月の頭に何故か研修旅行があり、一年生は必ず参加しなければならなかった。

学校側からしてみれば、生徒同士の交流を深める場所と共に友人を作る機会を与えているつもりなのだろう。あながち、それも無きにしも非ずと言えるが、実際生徒の目からしてみれば、特に自分のような消極的な人間にとっては、少々酷ではないか、と思った。

例えそうでなくとも、たいして面識も無い人間同士で数日間、寝食を共にする事に多少の違和感を感じずにはいられないのではなからうか。

人見知り余りしないが、自分から話を切り出すのは昔からどうにも苦手だ。みんなと居る事も勿論好きだし、楽しい事には是非参加を臨むが、どちらかと言えば口数は余り多くなく、無口の部類かもしれない。よく、

「恩田は落ち着いてるなあ」

「もっとしゃべろよ、清」

などと言われたりした。良くも悪くも、必要な事以外喋らないのかもしれない。

決して自分の意見が無い訳では無いけれども、よほどの事が無い限り、自分よりも強い意見があればそちらで充分満足出来てしまう事にもよった。

美術館を巡ったり、旅行自体はそう悪くは無かったのかもしれないが、結局の所、自分も含め馴れない人間同士それぞれに気を遣い合ってしまう、何処かたどたどしい旅行になってしまった気がした。

この旅行中に初めて友達になったのが蓮司だった。

旅行中、偶然に声をかけ合って、どのような会話をしていたものか、今はもう……思い出せない。

恐らく、やれ天気がどうだとか、欲しい服がどうだとか、そういった、至極普通で平凡な会話をし、そのままの流れでだらだらと今日までの日を消してしまったような気もする。

桜は散り切り木々には青葉が芽生え、眩しい太陽の日差しが空を覆い、やがて向日葵が黄色い花びらを広げ背を伸ばし、縞の種を宿して枯れるまで。

蓮司は徐々に欠席が目立ち始め、やがてぷつぷつと、学校へは来なくなった。

今は九月になる。

「……………じゃあ私、もう行くから」

狭いマンションの一室で、歳は四、五十代位だろう、歳の割には身綺麗にしている女が、プラダの黒いトートバッグを肩にかけながら、ベルベットのソファの上で腰を下ろしている、女の息子であろう若い少年に向かって言った。

「あんた、学校へはちゃんと行ってるの？ こないだはサボってたみたいだったけど。担任からあたしの店まで、連絡があったのよ」

バツが悪そうな顔で視線をずらした少年に対し不満だったのか、女は意外にも、あくまで明るい口調でなおも、続ける。

「まったく……折角勝ち取った養育費を無駄にしないで頂戴ね。ただでさえ、あんた産んでからお金の事でも苦労しっぱなしなんだからさー」

「わかってるよ、早く行けて」

こちらも言葉の割には、何処か冗談めいた明るさのある口調だ。

「わかってるのぉー？ 本当に。もう、何であんたのこと産んじやったのかしら、あたし」

「……ひっでえなあー」

笑いながら答える。

「ヤダ、時間。じゃあね蓮司。また来るわ」

ボタンと玄関のドアが閉まり、カッカッと響くピンヒールの音がやがて遠くなったその直後。ガンッと大きな音を立てて、白い壁に女のよこした合い鍵が強く叩き付けられた。

母に合わせて明るかった筈の少年の表情が一変して、暗い影がその瞳に一息に落ちる。

「……笑って言う事じゃねーんだよ、クソババア」

そう吐き捨てた。

「滝口ー、滝口はまた休みかぁ？ しょうがねえ奴だなー」

クラス担任の山田が出席簿を片手に半ば呆れた口調で呟く。

山田は、何処にでもいるようなごく普通の男性教師だ。

元来、教師とは生徒の誰に対しても平等でなければならないもので、誰か一人に対して特別扱いしたり、特定の生徒のみひいき目で見たりする事は許されない。故に、生徒一人一人に対するの、細かい機敏についてはどうしても疎くなりがちになるのが常であり、山田もその例外ではない。

しかしここ最近、どうにも無断欠席が目立つ滝口蓮司に対し、計りかねて、つい溜息が多くなる。

「誰か滝口にプリント渡してくれないか。無理にとは言わん、会った時にでもいいから。誰かいないかー？」

一瞬、ざわめくものの、クラスメイトの反応は無い。またか、と思いつつ、さっと清は席を立つ。

「先生、俺が預かります。あいつの……家はわかんないんですけど。会う機会ならあるかもしれないので」

「悪いな恩田。宜しく頼む」

山田は心なしか、ほっとしたように思われた。清が蓮司の分のプリントを受け取り席に着くと、山田の指示の下、生徒達は机を教室の後ろの方へとどかし、イーゼルにキャンバスを広げて、いつもの様にまた、授業が始まった。

今回モチーフとなる数種類の果物と、一輪の花が置かれた小さな丸テーブルを取り囲むかの様に、イーゼルと人間が集結していて、それぞれのキャンバスにコンテを走らせる。

じっくりとモチーフを見つめ、手を動かしながらも清は、蓮司、明日は来るだろうか?と思っ

た。今日来なければ、なら明日はどうだろう?といつも考える。

そう思いながらいつも、連絡しては、二人分のプリントをもらっては、期待している。

何故だか分からないけれど、何となく、自分まであいつが来る事を諦めたら、あいつはもう二度と学校へは来ないような、そんな気がして。

自分でもそれが自身の勝手な思い込みだとは分かっているものの、そう思わずにはいられなかった。

クラスメイトが蓮司に対して反応が酷薄なのは、単に蓮司のことをよく知らないだけであって、そのよく知りもしない人物の為だけに、わざわざ首を突っ込んで関わろうとする人間は決して多くは無いだろう。

誰も何も憎いわけじゃないし、誰も悪くはない。

ただ、蓮司と話した事のある人間ならば少なくはないだろうと思っし、その中でも打ち解けた会話をする者も何人かは居た筈だった。そして、よく知らないと言う点では清も同じだったから。

清は違和感を覚えた。そういった、友人に対しての解釈の差というものが、清の目からしてみればそれが酷く冷たく映った。

やがてそれが、何とかして自分が蓮司をここへ連れ出してやりたい気持ちへと繋がっていった。

よくよく考えてみれば、よく知りもしない人間の事を友達だと信じて、何とかしようとしている清はある意味で、異質と言えるのかもしれない。

休憩時間になると、清の席の方に、クラスメイトの和泉幸がやって来た。

幸は、赤みがかったこげ茶色の髪をしたボブカットで、黒目がちの小柄な女の子だ。制服のリボンに、紺色のハイソックスがよく似合っていて可愛い。

幸は春の研修旅行の際、移動のバスの中で蓮司と席が隣り同士だったらしく、蓮司が学校へ来ない事を少なからず気にして、心配してくれているみたいだ。

清とは授業中、写生で校舎の外を歩き回っている時に、偶然にも幸と話す機会があった為にその事を知った。それからというもの、挨拶と短い会話程度ならお互いに交わせるようになった。

「おはよー、恩田君。静物画どう？ 進んでる？」

「オハヨ。まあ、ぼちぼちかな。和泉は？」

「私？ 私はねー、遅いよー？ やっぱまだまだ下手……あつ、見せて見せて！」

言いつつ、幸の大きな瞳がくるくる動いて、楽しげに清のキャンバスを覗き込む。

「やっぱり恩田君は絵がうまいねー。なんていうのかな、バランスがいい」

「そうかな。和泉もうまいよ」

自分の絵を褒められて、悪い気はしない。それに、聞きようによっては厭味とも取れるかもしれない言葉も、幸の口からだど、素直に受け取れるのだから不思議だ。

照れ隠しに、僅かに目をそらしてしまう。

「何か恩田君にそう言われるとフクザツだなァー。私の見たらきっとその台詞言えないよー？」

「そうかな……」

単純に上手い下手の技術的な一面で考えれば確かに、清の方が上手いのもかもしれないが、絵の価値は何もそれだけでは決まらない。清には清の、幸には幸の良さがあるのだ。迎合を打ったわけではなかった。

「”そうかな”二回目。恩田君て面白いよね」

くすくすと幸が笑った。からかわれたかな？ と思いながらも、つつられて清も小さく笑った。

「ねえ、滝口君とは連絡取れた？ 会ってたり、する？ ここんとこ暫く見ないからどうなんだろうって」

「うん……連絡は、また取れない。メールの返事とか、来る時と来ない時の間隔が極端なんだ、蓮司は」

だからこそ、不安になる。何か自分はまずい事を言って傷付けてしまったのか、とか、本当は嫌がられているのだろうか、とか。まったく会えない上に連絡もとれないとなると、疑心暗鬼にもなってくる。

「そうなんだ……。なんか、大変そうだね……？」

「……こないだ会った。渋谷で。時間遅いから、あんまり話せなかったけど」

「どうだった、元気そうだった？」

「元気。何というか、蓮司っていつも会った時は元気に見えるんだけどな……。ああ、今度来るって言ってたな」

今月の、丁度俺の誕生日に。と出かかった口を閉ざした。

自分からわざわざ幸に伝える事でも無いだろう。

「いついつ？」

幸は無邪気に尋ねてくる。

「うん。多分今月中かな」

「そっかあ。来るといいよね！ 滝口君」

予鈴が鳴ると幸は嬉しそうに、じゃあね、と自分の席の方へと戻って行った。

清といえば、短く刈り込んだ無造作な黒髪で、生まれつきの重そうな二重瞼をしている。

穏やかそう、と言うよりは余り大きく表情が変わらないようなクールな印象を受ける顔立ちで、背丈は高くもなく低くもなく、ひょろっと細い。何処と無く気ままな猫のような、飄々とした雰囲気がある。その上猫背気味だ。

地味か派手かと訊かれれば、おそらく地味な部類になるだろう。

加えて蓮司は、同性の目線から見ても誰もが認めるであろう美形で、くっきりとした二重瞼と形の良い紅い唇を持っている。背は清より少し低いものの、体全体がすらりと細く姿勢が良い為に、何処となく仕草に品がある。

人懐こい犬の眼差しにも似た甘いマスクに、襟足が少し長めの薄茶色のさらさらの髪がいかにも華やかで人の目を惹き付ける。

研修旅行中の旅先でも見知らぬ女の子に何度か声をかけられたようであるし、実際モテるのだ。

そんな見かけからして正反対な二人が友人と成ったのは奇縁に違いないが、幾らでも例があるように、相反するが故にお互いに興味を引く何かがあったのかも知れなかった。

「蓮司、それどうやってんの？ アタマ」

「ああ、コレ？ 姉貴のコテ借りてやってんの。真っ直ぐになんねーと嫌なんだわ、俺」

「すげーな。確かに超真っ直ぐだわ。朝とか面倒臭くねーのか？」

「慣れだよ、慣れ。ま、面倒なんだけど。ん？ 清にもやってやろうかー？」

「おい、てか髪が足りねーだろ」

蓮司のいつも真っ直ぐでさらさらの髪が気になって、確かそんなやり取りをした記憶がある。

また、たまに幸と三人で居る時に、

「幸ちゃん元気してたー？」などと蓮司が幸と会話を交わしている姿を見ると、清はそういった明るいノリで幸と話せる蓮司を度々、羨ましく思ったものだ。

本当に数える程しか学校に来なくなってしまっている蓮司の方が、毎回きちんと学校に来ている清よりも幸と話が進むというのも妙な話だが、単にこれは、女の子と話し慣れているかそうでないかの違いに過ぎない。蓮司に比べ、言う迄も無く清はそういった事に関しては奥手だった。

しかし何より最大の理由は、清は密に幸に懸想しているからで。

同い年でありながら純粹で屈託がなく、明るいがおとなしい、控えめな幸に清は淡い想いを寄せていた。

蓮司はそういった事に敏感な方なので、

「なあ、清ってさ。…もしかして、幸ちゃん好きっしょ？」

と早々に気が付いて訊いて来たのだった。清が、

「……うん。……好きかも」

と、蓮司のストレートな発言に内心戸惑いつつも照れ臭そうに答えると、蓮司は心底嬉しそうに清を見つめながら、

「マジかよ、い～なあ！ 清！ 俺、協力するよ。頑張れよ！」

などと、自分の事の様に喜び、整った顔に光の射すような笑顔で答えた。



一瞬、学校へも来ず、いつ協力するのだと疑わしくなる所だが、清にとってはそんな些細な蓮司の気遣いが嬉しかったりする。協力するしない以前に、その気持ち自体が嬉しかった。

ただ、清にとっては幸が特別可愛い為に、少々不安になって、蓮司に幸の事をどう思うかついでに尋ねてみた所、蓮司は、

「それなら全然大丈夫。清には悪いけど.....ぶっちゃけ俺の好みじゃないんだよね。まー、可愛いとは思うよ？ 友達として」

などとバツサリと言い切られて呆気無かった。そこまではっきり言われてしまうと、流石に清も杞憂に過ぎなかったんだなと少し安心する。

当の幸が、一体誰の事が好きなのか、あるいは既に誰かと付き合っているのか、この時はまだ、清も蓮司も知る由もない。

ところで、数日前。

清が渋谷で蓮司に会ったのは、本当に偶然だった。

二人の通う学校は、都内にある。清の家は都内の外れに位置するが、渋谷は通らない。

蓮司の住んでるマンションも、都内の外れに位置するが、必ず渋谷を通過する。

学校を挟み、いつも逆の方向で二人は別れている。

普段学校が終わればすぐにそのままアルバイト先に向かう清だったが、その日は丁度、先日代行して働いた分のお休みを貰った為に珍しく時間が空いていた。

ふいに、思い出した。

（そういえば、蓮司、上京して来てからはちょくちょく渋谷で遊ぶような事を言っていたっけな）

蓮司は家族の都合で、この高校を受けると同時に、静岡から東京都内へ引越して来ていると聞いた。

腕時計は持って無いので、携帯の液晶で時間をさっと確認する。

（時間もあるし……寄ってみようか）

そんなふうにした。

いきなり今日、今から会えそうか尋ねるのもどうかと思ったし、渋谷と言っても広いので、だから別に会えたらいいなあ程度の感覚で、好きなお店をふらりと廻って、それで帰るつもりだった。

そう思いつつ歩いていた矢先。街の人込みの中に、見覚えのある薄茶色の頭を見つけた時は信じられない思いがした。

思わず、我が目を疑ってしまう。

（あれは……蓮司、だよな……？）

相変わらず、整った顔立ちと細い身体が人目を引く。

相変わらず、今日も学校へ来てはいなかったが。

しかしかなり自己流に着崩してはいるものの、清と同じ制服をちゃんと着ていて、スクールバッグの手提げひもを両肩に引っ搔けてしゃべっていた。

（まさか本当に会えるなんてな……。学校、来なかったけど、本当は来るつもりだったのか……？）

人込みを縫って蓮司がわかる所まで足速に近付いて行く。

「蓮司！！ 蓮司だろ！？」

「……！！ 清じゃねーか！！ おおーっす、久しぶりー！！」

清に気が付いた蓮司は一瞬、目を見開いて驚き、そう言い、こちらへ駆け寄って来た。人通りが激しいので、少し横にずれた場所で二人、立ち止まる。驚いたのは清も同じだ。

「すげー偶然だな！ こんなところで清に会えると思わなかった！ ……て、確かお前方角反対じゃなかったっけ？」

「ああ、そうなんだけど。たまたま時間が空いてさ。買い物がてら寄ってみた。したら。俺も

まさか蓮司に会えると思わなかった」

別に約束も期待もしていなかったのに、偶然に会えたのは奇跡に近い。

「マジで？　すげーな。じゃあ清今時間空いてんの」

「うん、暇。蓮司はこれから用事とかねーのか？」

「無いよー。暇よー」

「んじゃ、ここで立っててもあれだし、とりあえずどっかで茶でもしよっぜ」

「俺もそう思ったとこだわ、そこのマックでいいか？」

店に入り席を捜すと、丁度二階席の奥が空いていたので、そこに二人座ることにした。

蓮司が、

「ねえ、俺ソファ座ってもいい？」

と尋ねてきたので、清は、

「あぁいいよ、じゃ、俺こっち座るわ」

と答え椅子にかけた。どうやら蓮司はこういった小さいマナーでも大切にするようで、きっと女の子相手には黙って椅子に座り、ソファ席を譲るのだろう。

清は男同志で別にそこまで気にした事がなかった手前、何となくこそばゆかったが、蓮司の良い所のひとつなのだろうと感心した。ちょっとした所作に、細かい気遣いがある。さらに、ソファに座るなり、

「かばん」

と手をひらひらさせながら、蓮司は続けて

「こっち置く？」

などと訊いて来たものだから、いよいよ細かい。

.....それにしても。

徐々に蓮司に会って、二人で話をしようと思っていたのに、なかなか思うように話を切り出す事が出来ない。

清は、蓮司に言いたい事、聞きたい事が沢山ある筈だった。例えば、何故学校に来れないのか、とか。来たくないのか。一体何に心を悩ましているのか。

なのに、こうしていざ、本人を目の前にすると、どうしてどうにも言葉にならないのだろう。

(何か.....喋らないと.....)

とは思う。しかし、学校に来られない、と言うからには蓮司本人にきっと何らかの複雑な心情があるからであって、折角こうして学校から離れた場所で友達らしい事しているのにあえてそこに突っ込むのもどうかとためらう自分もいる。傷付けてしまわないだろうか。

(そこを知って俺が少しでも理解出来たのなら、蓮司は心が晴れてまた学校に来れるようになったりしないかな)

勿論、自分一人の力で蓮司をどうこう出来るなんて決して思わないけれども、出来る事なら、自分なりに蓮司の力になりたい。

叶うものなら、学校に行けるようになってほしい。

そう考えるも、結局の所本人の口から聞かない事には何も始まらないのだが。

食べ始めて少しの沈黙の後、

「.....なんかさ」

少し長めな爪の綺麗な指先を、フライドポテトから離して蓮司が先に口を開いた。

「なんか食ってる時って無口になるよな。清もそうだったりする？」

「え？ あ、ああ。ケッコーそうかしんない。確かに話すならなるべく飲み込んでから話せて思うわ」

「じゃーおんなじだなー。とりあえず、クチにモノ入れて喋らないでくれって感じるよな」  
意外に蓮司はこう見えて、割と神経質なのかもしれない。しかし蓮司が先に口を開いてくれたおかげで、話しやすくもなった。

「あのさ……」

「あのさ……蓮司」

「ん、なんだよ？」

「……俺、」

と言い出したきり、清は結局言葉に詰まってしまった。

瞬間、自分の頭の中で切り出すべきであった話題が、あらぬ方向へシフトする。

「いや俺、もうすぐ姉貴が誕生日でさ。何かプレゼントしようかと思ってるんだけど全然分かんなくて。なんかいいのいないかな？」

咄嗟に切り替えた話題だが、清の事だから、事実である事を曲げてはいない。しかしあろうことに何となく切り替えたこの話題が元で、意外な方向へまた話が展開するとは思わなかった。

「マジで？」

蓮司がストローをその形の良い唇から離し、信じられない、とでも言うような目で清を見た。

「清、ねーちゃん居たのかよ。初耳。てか、俺もいるんだよね、姉貴っちゅーか姉貴達がさ」

「そういえばコテ、だっけ？ アレ姉ちゃんに借りてるとかお前言ってたもんな。姉貴達って事は上に何人かいんの？」

「うん、まあ。ケッコー、年離れてたりするけど。三人ねーちゃん居るよ。一番年近いねーちゃんがみつつ違いつて感じ」

「すげー、女所帯。そんだけ居ると立場弱くなりそー」

「わは、ある意味鍛えられたよ、俺は。……あんまみんな揃って一緒に暮らしてたって感じじゃなかったけどね」

そう言った蓮司の言葉の裏に何処か、影が落ちたような気がしたが、すぐさま。

「そう言う清はどうなんだよ？ 尻に敷かれてんじゃねーの？」

いたずらっぽく蓮司が笑う。

「いや、何ちゅーか俺は。……ねーちゃんにはかなわねー、わ。マジでもし三人も居たら冗談キツイ」

からかったつもりなのに、目を細めながら真剣にそう答えた清の様子が面白かったらしく、蓮司が声をあげて笑った。

清の姉は清とは二つ違いで、はきはきとものを言い、面倒見も良く、ちゃきちゃきと何事も進めようとする活動的な人間である。控えめで何処か自信がなく、はっきりと言葉を伝える事の苦手な清とは真逆ではあるものの、特に仲が悪いというわけではない。不器用な清にとって頼りがいのある姉を、内心尊敬していたりもした。

「そんなに性格きつーい感じなの？ ねーちゃん」

「ん。怒らせると超ーこええーよマジで。最近めったにケンカなんてしないからいーけど」

「ふーん。清でもケンカしたりすんだな。あんま想像つかないわ」

「そりゃするって。しょーもねーことでもめたりさ。お前だつてするだろ？ ケンカくらい」

「まーね。うん、俺んところは……まーひどいよ！ほんとしょーもない」

冗談めかして笑いながら蓮司が言った。

「おいおい……」

「実は昨日も一番下のねーちゃんとケンカしたばっかです。すげーめんどくさくて疲れたわ」

「そうだったのか。どういうわけでケンカになったんだよ？」

「言ったら清は呆れるよ」

「何でだよ」

「……くだらな過ぎてさ」

(言いたくないのか？ 蓮司……)

それ以上訊くのも何となく憚れたので、止めた。

「そっか。まあ……その後仲直りしたのか？」

「一応したよ。けど改めて、俺とあいつは反りが合わないって思った」

「性格的にってことか？ 合わないって、どんなふうにさ」

蓮司がいつになく強い口調で言うので、清としては気になる。

「うーんと……。そうだな、なんちゅーか、女の武器をフルで使う感じ」

「なんだよ、それ」

清には、蓮司の言っている言葉の意味がよくわからない。

「なんつったらいいのかなあ……今さ、俺その一番下の姉貴とここに住ましてもらってて。便利じゃん？ やっぱ。都内だから実家から通うより全然近いし。お袋が姉貴にそう頼んでくれたんだけどね……」

蓮司のくわえたストローの先が、噛んで弱く潰れている。

「よく下らない事で意見とか食い違ってケンカばっか。その度泣くんだよ。涙は女の武器、とか言うじゃん？ まさにそれ」

成程、女の武器とはそういう事かと清はようやく理解した。しかし涙するからには、それなりの理由はないものなのか。

「……そんな困らせる事姉ちゃんに言ってるのか？ お前」

「俺は……姉貴には一応、気を遣ってるつもりだよ。まあ……女なんだし。そりゃあね。俺から言うのもなんだけど、困らせてんのはぶっちゃけ姉貴の方だよ」

蓮司は一見軽そうには見えるかもしれないが、こう見えて周りには人一倍気を遣うタイプだという事を、清は少しずつ分かってきている。

なので、実情はどうであれ、彼の姉が何かしら問題のある人物なのだろうかと推測した。

「確かに泣かれたら困るよな……どうしたらいいのか、マジでわからなくなる」

清は自身の姉とは今やほとんどケンカするような事はないものの、幼い頃にやはりケンカをして、泣かれてしまった記憶は今でも何だか忘れられずに覚えている。それがあくまで日常的な事象である蓮司は、どんな思いがするだろう。

「だろっ！？ スゲー困るんだわ。いつも自分の都合が悪くなったり、意見が通らないとその度泣いてさ。で、こっちが悪くないにせよ、責任感じて下手に出るとさっきの涙は何っ？ てカンジでコロッと泣き止むんだぜ」

「夕チが悪いな、それは」

「振り回されっぱなしだよ。それが毎回続くからさー、やってらんない！」

「だな。それだけ器用に泣けるのも、ある意味すごいけど」

「いるんだってーそういう女も。清にはあんま解らないかもしんないけどさ。俺は清の姉貴が羨ましいよ」

「そうか？ まあ……蓮司の姉ちゃんのが美人だろな、きっと」

「顔だけだって」

「そこは否定しないんだな」

清がそう言って肩をすくめておどけてみせると、それを見て蓮司がくすっと笑った。

「プレゼントやるなんて、仲良い証拠じゃん。いいねえ」

ドリンクの紙コップに水滴が滴り落ちて、中の氷がすっかり溶けている。薄くなった中身を飲み干しながら、清はこの時ばかりはちょっとだけ、姉と仲の良い自分が何か照れ臭かった。

「そういえば、清って誕生日いつなんだよ？」

清の姉がもうすぐ誕生日という事から、思いたったのだろうか、蓮司がふいに尋ねた。

「えっ……ああ。今月の……七日だけど」



「なんだ、お前自分の姉貴より先に自分の誕生日あんじゃん。水臭いな、言ってくればいいのか」

「……自分のは言いにくいんだよ」

「確かにそれはあるな、うん。……そうだ！」

「なんだよ？」

「清の誕生日は俺、学校行く事にするわ。マジで。それ位はしたいし」

「いいよ、別に気ィ遣ってくれなくたって」

「決めた。よし、ちゃんと忘れないようにしよっ」

「おおい……」

心底楽しそうにしている蓮司の様子を見ていたら、清もその日は本当に蓮司が来てくれるのだ、と言うことに胸が高鳴った。

わざわざ自分の（それも野郎の）誕生日に合わせてくるなんて、こそばゆくもあるが、かと言ってそう悪い気はしない。

それこそ、何かしら理由をつけてでも蓮司が学校へ来られるならば、清としては願ったりなのだ。

「お祝いしてやるからなー」

「マジで。やった、楽しみにしてる」

清はそう言って、嬉しそうに笑った。

無論、清は誕生日だからといって、蓮司から何か見返りを貰おうなどという考えは持ち合わせていない。もし考えたところで、期待もしないだろうけれど。

ただその日蓮司が来てくれればそれでいいと、それだけを思っていた。

店を出るとすっかり日が暮れていて、蓮司の銀のピアスが点き始めたばかりのネオンの光を帯びてきらりとしたのが、何だか眩しく見えた。

「ただいま」

「おかえり清。真梨香は今日、どうするのか聞いている？」

このところ帰宅すると大抵母に、この質問を投げられる。

母は携帯電話を持っていない。清の携帯に先程、姉の真梨香から短いメールが入っていた。

「姉ちゃん今日も遅くなるってさ」

「.....そう。あんたはご飯、どうするの？」

「ああ、うん。食べるよ。着替えてくる」

夕方蓮司と一緒にマックで少し食べたので、実のところさほど空腹でも無かったけれど、折角母親が用意してくれた料理をもったいない事にしたくないと思った。どうにも、食べ物を残すのは苦手な性分らしい。ただ普段より気持ち少なめに白飯を自分でよそった。

清の家では決まって、夕食の時間には家族揃って同じ食卓で食べる事が暗黙の了解となっている。

二つ違いの姉の真梨香が、アルバイトに部活動、加えて大学受験も控え何かと忙しい為に、ここ最近はその姉を抜いた父、母、清の三人で食事を摂る場合が圧倒的に多くなった。

「何だ真梨香はまたいないのか。あれであいつ、勉強の方はちゃんとやってるのか？」

不機嫌そうに言い放つ父を横目に見ながら清は味噌汁をすする。

「姉ちゃんなら大丈夫だよ。何か、外のほうが集中出来るって言ってた」

「ここに家があるだろ。家でやりゃあいいだろうに」

「多分また図書館とかに居るんじゃないか。捗るならそれで別にいいと思うけど」

大学受験を控えた真梨香は、模擬試験の受験料、それに応じて発生する交通費など、何かと細かいお金がかかる。そしてそのうちのほとんどを父母には明確には話さず、自身のアルバイト代で賄っている事を清は知っていた。

「.....だってキリないじゃん？ いちいち私が言ってみたところでさ。私の周りのコたちはみんな親が出してて、当たり前っちゃ当たり前かもだけど.....ちょっとだけね、まあムカツクわな」

姉は恐らく誰にも言わなかっただろう言葉をいつであったか、ぽろりと清に零した。父母は未だ知らなかった。

この時代、この日本で有り触れている事象。今や何処の家庭に置いても決して珍しい事では無いように、昨年の中頃、清の父親は勤めていた会社からリストラされた。

以前から父は二回程転職しており、ある時は課長にまで登り詰めた事もある。いずれも人の上に立つ立場の人間だった。

ちょっとした収入の違いから前職を辞し、新たな職場へと転向したのが三回目。そこでようやく腰をおろした筈が、会社自体の業績が不安定。大量のリストラされる人間のリストにあえなく父も名を連ねた。

男というものには仕事がある種、自身のステイタスのようになっているてらいが多分にあると筆

者は思う。

若いうちから人を指導する立場にあったプライドの高い清の父は、それは酷く傷付けられた。信じて疑わなかったモノや人から裏切られる気持ちというものは誰にも計り知れない。

清も男だ、父の傷付いた心が丸きりわからないでもない。

しかしまだ高校生で幼さの残る清が理解するまでには限界があるのは事実だ。大人にだって人の心を推し量るのは難しい。

それでも少しでもこの父の気持ちを理解したいと思った。

どんな目に遭おうと父は清の父であり、それは今までもこれからも変わる事は無いのだから。暫く無職で、打ちひしがれていた父と二人きりになった時、よく愚痴を聞いた。

同じ言葉を繰り返す。『何故俺が...』『俺だったら...』繰り返し聞く。

初めて見る弱い父。自分が本当の意味で理解するにはもう少し先になるであろう筈の、間接的に学ぶ世の中の無常。

清にはどうする事も出来ない。

時々、相槌を打ったり、思うことを二、三口にしてはみるものの、黙って聞いている。

よもやどうする事も出来ない憤りよりも、只々、空しさを覚える。

父も人間だと思った。

その後程なくして新しい仕事に就いた父は、家族と生きて行く為に初めて人の下についた。

元々、決して裕福な家庭であったわけではない。以前に増して、収入は激減した。

母はパートタイムを、姉はバイト先を増やした。

家族が窮地に陥ったこんな時、潔く次の行動に移せる母や姉を清は頼もしく感じた。女というものは、一度割り切るとこうも早いものなのか。

清も高校生になると同時にバイトを始めた。

家族の誰も、父を責めなかったが.....

父にとってこれまで経験することのなかった人を動かせないというストレスは、彼の心身を着実に蝕んでいった。

職場環境、給料の差、未だ拭いきれない未練。その全てが彼の誇りを傷付ける。

父は家族の誰の目から見ても明らかに煙草の量が増えている。灰皿を片付けながら母は溜息をつく。しかし母は何も言わない。押し黙っている。

清は思う。父はこんなにも、卑屈な男だったろうか。

会社から帰宅した父が晩酌をし始めるといつも決まって同じ愚痴のくだりが始まるのだ。

仕方のないもの、と始めは思っていた。それこそ新しい仕事に就くまで、家族で一番父の愚痴の相手をしていたのは紛れも無く清だ。

愚痴なんて、ある程度聞き流してしまえば良いのに、真面目な清は真っ向から相手の言葉や感情を受け止めてしまう。

そう、真っ直ぐに受け止め過ぎるのだ。

いい加減、疲れてきた。

誰だって誰かの愚痴を会う度聞かされていれば、確実に疲れる。こちらまで鬱々と暗い気持ちになってくる。そして距離を置くようになるのだ。

清は卑屈な父が嫌いだった。

少々尊大であったとしても、前職に誇りを持って働く男らしい父が好きだった。

しかし状況は変わった。

今となってはどうにもならない事実を何度も口にして、お金がない事を目の前で何度も嘆くのはとにかく止めてほしかった。

何にせよ父は働いているのだし、家族も出来ることをしている。

これ以上父が、自分で自分をおとしめる必要なんてないのに.....

この気持ちをどうにか父に伝えられるような術を、清は持っていない。

始めは相槌などを一所懸命に打っていた清の口数は減っていった。

下手に口を挟まないこと、それが一番てっとり早く話を終わらせられると学習してしまった。

とはいえ、まったく相手にしないということは清には無理ではあったが。

母が始めから何も言わないのは、誰より父を知っているから。

そして父ももとより母を知っている。

些かつっけんどんにも見える母の一貫した態度に父は苛立つらしく、やがて母に対しても暴言を吐くようになった。

相変わらず母は、押し黙っている。ただ、耐えている。耐えつつ、黙々といつものように家事をこなすのだ。

姉は元々外向的な性格で、外出している事が多かったが、この頃から以前より出かける頻度が高くなったように思われる。

母も姉も、父に対してそれぞれ思う所はあるのだろうが、おくびにも出さない。

それが清には出来ない。

父が母に対して暴言を吐いていれば、そんな父を憎いと思う。

いいように言われっぱなしの母を見ると、何故言い返さないのか疑問に思う。

ほとんど眠る為だけに帰宅する姉をズルイと感じる反面、羨ましく思う。

だからいつも苦しい。

苦しいのは父だと思うのに、苦しい。

父の苦しみがまるで自分のとなりになるような気がしてきた。

何故自分がこんなにも苦しいのか、苦しくて分からない。

清はただ一人、割り切る事の出来ないもどかしさを抱えている。

「清、お前が真梨香のこと勝手に大丈夫って言う義理はねーだろ。俺が真梨香から直接聞かないと分からない事だよ」

「……まあ、そうだね」

（俺、姉ちゃんから直接聞いたのだけど、まあそうだよな。うん）

「あいつも、俺がリストラされたから俺の事を恨んでるんだろな」

「そんなこと言ってねーだろ、別に恨んでなんかない」

「だからお前に言えた口じゃねーつつってんだろ、清。実際俺はリストラされてから真梨香の姿、家でほとんど見てないんだからな」

父は仕事時間の関係上、姉の帰宅よりも早い時間に就寝する。

確かに姉は父と顔を合わせる時間が誰より少ない。

洗い場に立つ母に向き直って父が声をかける。

「おい、お前からあいつに言っておけよな。早く帰れってよ。あんたの家は何処なんだって尋いてやれよ」

「……………」

(また何も言わないのな)

清はこんなやりとりにうんざりしている。

「態度わりーな、俺を何だと思ってるんだ。だいたいお前は……」

「……ごっそさん」

カチャンと少し大きな音を立てながら、使った食器をまとめて母に手渡した。

受け入れたくとも受け入れられずに悶えるのは、所詮割り切れていないから。  
僕らから見たこの世界はとても住みにくくて、まるで自分たった一人のように。

駅から遠い、とよく思う。

ただでさえ、面倒が嫌いだから。

低血圧だから、朝も辛い。

歩いて十五、二十分程の道のりが、激しくダルい。

なら自転車でも買えば良いのだけれど、その自転車自体、余り好きじゃなかったりするワケだ。  
ほら、髪も乱れるし。俺が毎朝シャカシャカチャリンコ漕ぐなんて、自分で想像しただけでも笑えてくるし？

自分自身のワガママさ加減と、ただならぬテンションの低さはこれでも一応自覚していて、尚かつ直らないものだとも思う。

口ではいくらでも言ってやれるけれど、きっと直そうとも思っていないし、直す事すら面倒に感じている。

結構いいマンションの一室。下駄箱には綺麗な色味のパンプス、キラキラしたピンヒール達が立ち並ぶ。

一段下がった左端。俺のほぼ新品に近い、通学用の黒いローファーと、お気に入りのブーツとスニーカーが一足ずつ置いてある。そっと取り出すと、頼んでもいないのに仄かに花のような香りがした。

姉は、多分美人だ。弟の自分から見ても、世間的にも。

最近読者モデルとやらを始めたらしく、これまた綺麗な女性陣に混ざって、見慣れた姉の姿をそのへんのファッション雑誌からちらほらと見つけることが出来た。

姉には、中学校時代からの長い付き合いの彼氏が居て、くっついては別れ、別れてはヨリを戻してを繰り返している。

途中、途中で他の野郎と付き合っても結局続かずに、戻ってきてしまうそうだ。

一度ヨリを戻すと癖になると何処かで聞いたことがあるけれど、まさしくその典型が、自分の姉貴に他ならないようだと思うにはいられない。

姉は、すぐ泣く。これが一番厄介だった。

特に男とのゴタゴタがあったその日の夜は終始不機嫌で、何処で彼女の地雷を踏んでしまうか分からない。

かといって一緒に住んでいる以上、どうしても無言というわけにもいかなかったりする。ほんの些細な一言が彼女の癪に障ったりするのだ。

ヒステリックに責め立てられて、なす術も無いまま、とにかく俺が謝ってその場がおさまるケースがほとんどと言っていいと思う。

昨日も先週も、くだらない事で口論になった。

余りに馬鹿馬鹿しくて、呆れてしまう。ただでさえ極めて低い俺のテンションはさらにだだ下がりだ。

そんなに俺は彼女の地雷を踏みまくっているのかと。そこに俺の意思があっちはいけないものか。謎だ。

そして今日。

彼女はとうとう俺の地雷を踏んだのだ。

「本ッ当ウチラ、合わないよね。父さん違うから余計合わないのかも」

.....そう、姉弟でただ一人、俺だけが半分違う男の血が流れている。

「そのまま返してやるよ」

吐き捨てて、マンションを飛び出した。

あの部屋に、今日は戻りたくないと思った。もう夜も遅い時間だったけれど、そんなことはどうでも良かった。

財布と携帯しか持っていない身なりで、二十四時間営業している店が他に分からず、マックに入る。

都内の高校に通う為に上京し、一番下の姉と暮らすようになってから初めて、蓮司は自分だけが他の姉達三人とは父親が違うという事を知った。

姉が今日のようにふとしたきっかけで口走ったのを初めて耳にした時は流石に我が耳を疑った。

すぐさま母に問い詰めるとついに白状して、以後母や姉が蓮司に対して家族間の繋がりの事実を隠すことはなくなった。



だが.....依然としてこの鬱屈した感情は充たされやしない。

血の繋がりを理由に何でも結び付ける姉も、会った事の無い姉達の父も、父も、母も気に入らない。気に入らなかった。

本当の姉弟ではないという事実を叩き付けられて、頭では理解しようにも、まるで心が追いついていかない。

今まで自分の信じてきたものが急に様変わりしたようで実感がわかず、他人ごとのようにも思えてくる。

目の前に映るこの女達は誰なのか。自分は一体誰なんだろう。どうしてこんなにも、当たり前だった筈の事が今更疑わしく感じられる？

家族の筈なのに、その家族にどうしようもなく苛立つ自分に吐き気がする。

二、三注文して煙草に火を付ける。

蓮司の年齢で煙草は無論禁止だが、ただ彼はその整った外見の所為か否か、周りに何も言わせない独特の空気があった。

慣れた手つきで暫く煙と戯れると、ようやく落ち着いてきたような気がした。

二箱空けて気が付いた時にはもう朝で、姉が大学へ出かけた頃合いになったので帰ることにした。

.....眠い。

眠いがそろそろ自分も高校、学校が始まる時間だ。行かないと。面倒くせえなあ。

部屋に戻ってベッドに突っ伏したら、すぐに瞼が重たくなってきた。そういえばこのところ、余りよく眠れていなかった気がする。

そう思うと途端に、姉と顔を合わせずに済むこの時間がいとおしくもなってきた。

ああ、今日って何日だったっけ。もう思い出せない。

忘却したい、と思うがままに深い眠りに落ちていった。

「誕生日、か……」

誰に言うでもなく、清は一人、呟いた。

そう、今日は清の十六歳の誕生日だ。

かと言って今日に限って何か特別なことをするわけでもない。

せいぜい姉の真梨香がさらっと何かくれる位で、一緒に祝ってくれるような可愛い彼女もいないし、今年も何となくまた過ぎて行くのだろうと思っていたけれど。

今回は、今日は、ちょっと話が違う。

数日前にあの蓮司が、清を祝いたいが為に学校に来てくれると言ってくれたのだ。

(蓮司……あいつマジで今日来てくれんのかな)

いつもとさして変わらない朝なのに、妙にふわふわと落ち着かない自分が自分で何だか可笑しくて、思わずふっと笑みがこぼれた。

(蓮司が今日、学校来たら和泉もきっと喜ぶし、それで……二人からおめでとうとか言われたら、俺にとっちゃスゲーいい日になるかもしれないな)

そんなことを楽しみに考えながら、清はいつものように黙々とカリキュラムをこなしてゆく。

一限を終え、二限、三限と順調に時間が流れていった。

お昼を過ぎた頃から、自然と意識から遠ざけていたある予感が、心の奥底から疼き始める。

清の表情は徐々に堅くなってゆく。

五限、六限を終えた。

危惧していた事が今起こる。授業が終わった。

蓮司は今日も、来なかった。

期待を、してはいけなかったのだと思う。はじめから。

期待？ そんなに自分を祝ってほしかったのだろうか。違うと思いたい。

ただでさえ学校へ来れず不安定な状態にいるであろう蓮司に、変に期待をかけたり、必要以上に彼の一挙一動を信じることは何か違うと思う。それも知っている筈だった。

(それでも……俺は。只……)

……来てほしかった。

そして、たかが自分の誕生日でも、忘れられていた？ という現実には思いの外、打ちのめされている。今、こんなにも。

今日に限ってバイトの休みを嬉々として入れてしまっていたことが悔やまれた。無心に働いていれば、またいつもと何ら変わることもない一日をやり過ごせた筈なのに。

(……くだらない。何で俺今こんな、ショックなんだよ)

家に帰って早々清は、何も手につかずにベッドに顔を突っ伏して倒れ込んだ。

(あいつ……今どうしてるかな。俺、今日誕生日なんだぜ。……一応)

横目でぼんやり見つめる携帯は鳴らない。思い立って昼過ぎにごく短文でメールを入れてはみたものの、いつものように反応は無かった。

(忘れて、たんだよな、きっと。覚えてんのにスルーってわけじゃないよな。多分。あいつの性格からして……)

あいつの性格？ 思ったところで果たして何処まで理解しているものか、一方的過ぎて疑問が残るが。

腐心していると、ドアを二、三軽くノックする音と共に明るい声が呼びかけてきた。

「清、いるんしょー？ おかえり。入っていー？」

姉の真梨香だ。

真梨香は、天然パーマの長い黒髪をオールバックにしておでこを出し、その髪を耳の下で二つに分けて結んでいる。清と同じく瞼は重めだが、はっきりとした何処か迫力のある大きな瞳をしていていかにも快活そうである。

忙しい姉とこうして二人きりで話すのは、同じ家にいながらも何だか久しぶりな気がした。

「ん。だいじょぶ」

さっとベッドから身を起こして、ドアを開いた。

「お誕生日オメデトー！ハイこれ、プレゼント」

「あ、おお。……ありがとう」

毎年姉には誕生祝いを貰っている為、ある程度こうくるという予想はしていたが、つい先程までの沈んだ状態が抜け切れていない為に、多少面食らう。

だがやはり、毎回この瞬間はとても嬉しいものだ。ほい、と差し出され綺麗にラッピングされた淡いブルーの半透明のそれから、可愛らしいクッキー達がちらちら見える。口元がほころんだ。

真梨香の意向により、お互いが気を遣うことのないようにと余り高価な物のやりとりはしない。

姉はお菓子作りが得意で、中でもクッキーやマフィンなどの焼き菓子についてはお店に並んでいるような仕上がりの絶品であり、清の好物でもある。友人や彼氏にあげるため、真梨香がキッチンに立っている時に丁度清が居れば、味見役をさせられたり、おこぼれをもらえたりしたりすることもあった。

「夜、焼いたんだよー。アタシもマメっしょ？ 感謝しろよ」

「へえ。ありがとうーございますまりかさま」

清がいささか大仰に両手で包みを受け取ると、真梨香が嬉しそうにニカッと笑った。

「そういや清、今日バイト休みなん。珍しいねー」

「うん、まあ……」

「アタシでっきりまたバイトで遅いのかと思ってたからさー。ま、今日直接渡せて良かったわ」

「……ん、ちょっとね。コレ、後で食うよ。マジでありがとう」

「なーにー？ ちょっとって！ 変なの。気になるじゃん」

「あ、や……別にどってことねーんだけど……」

何気ない姉の一言で思いの他動揺している自分が余りにも馬鹿馬鹿しいではないか。

「ふうん？ まー、あんたが話したくないならいーけど。じゃ、アタシ行くね」

そうだ、姉には関係ない話をしたところできっと迷惑だろう。話す必要はないと思っているのに、相手の関心を傾けるような物の言い方をしてしまうのは良くない。

真梨香が踵を返して、ドアノブに手をかけた時だった。

「……………ねーちゃん」

清はその思いとは裏腹に、姉を呼び止めてしまった。